女子青年界第十四巻第五號（毎月一回一日發行）
大正六年五月一日發行　大正六年四月二十八日印刷納本
明治卅七年五月七日第三種郵便物認可

要目

女子青年界

第十四巻
五月號

女子青年界第十四巻第五號

目次

YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

Vlm (XIV) MAY 1917. Number 5.

宮内省
各宮殿下
御買上八回

桑港萬國大博覽會銀牌受領

於博覽會共進會金、銀、銅牌廿餘回受賞

甲斐國産

御中越次第商品目錄進呈

水晶細工品

印篆刻
眼鏡一式
軸掛
裝身具
床置物
珠數

指環、小差、簪、櫛、根掛、エリ止、帶メ、守玉、ピン、カフス釦

印傳袋物

二ッ折札入
弗入
財布
莨入
手提
手袋
スクールバック

共紐、叺、御殿持、巻莨入、火の用心、文人持

一水晶印章篆刻幷に細工品共懇切を旨とし精々勉強仕り御好みに應じ如何樣にも確實に御調進可申上候

商標

玉泉堂

山梨縣甲府市柳町
電話百〇二番
振替口座東京五〇六四番

SUNDAY SCHOOL SUPPLIES.

Peloubet's Select Notes on the International S. S. Lessons	2.50–.12
Gist of the lessons, by Torrey	.55–.06
Tarbell's Teachers' Guide.	2.50–.12
The Lesson Handbook, by Meyer	.55–.06
Berean Leaf Cluster (Picture Rolls, Quarterly) Per Year,	10.00–.48
Berean Cards Per Year,	40–.08

萬國日曜學課(リーフレツト)週刊十五組以上郵税不要
一枚三厘、期刊雜誌萬國日曜學課一ケ年四回發行

スザンナウエスレー傳、スペンサー女史元良ヨネ子女史共著……………….25–.06
ハリス夫人傳、山鹿旗之進著……… 1.00–.08
七日間、美山豐子、田中夕風共譯…… 35–.06
歐米女子立身傳、松本正譯………… .40–.06
へれんけらー自叙傳我身の物語…….50–.08
穽より、ミラー原著、伊藤宗輔譯…….30–.06
みあしのあと、セルドン原著、安孫子貞次郎譯……………………….55–. 8
戰場の婦人、沖野、吉田共著…………20–.04
家庭清話、堀口翠巒著………………..30–.04
野百合、碧川企牧男著………………..25– 04
墨影、三浦泰一郎著…………………..30–.04
怒るな働け、嘉悦孝子著……………..8–.08
嚴の處女、ダヌンツイオ著、知達譯 1.10–.08
武藏野の一角に立ちて、別所梅之助著……………………………… 1.10–.08
(縮刷)何處へ行く、松本雲舟譯……1.10–.08
一日一善、山本瀧之助著……………..65–.08
日々の力、根本正譯、…………ポツケツト形紙貳拾五錢、布四拾錢、皮九拾錢
同 四六版紙參拾五錢、布五拾錢、皮壹圓
日々の基督、津金𥞣村著………… 1.30–.08
靈交錄、フオスチツク原著、栗原基譯……………………………….80–.08
耶蘇の人格、栗原基譯………………..60–.06
クリスマス對話集、小野兵衛著……..35–.06

Gospel Story in Art, by John La Farge ……… 8.25–.2
Life of Jesus of Nazareth, by Hale. ……… 4.15–.16
Greater Men and Women of the Bible, by Hastings ……… 3.30–.12
Quiet Talks on Prayer, by Gordon ……… 1.40–.08
Quiet Talks on Service, by Gordon ……… 140–.08
Thirteen Appreciations, by Whyte ……… 3.30–.06
Second Coming, by Kumme & James ……… 1.10–.08
Loneliness of Christ, by Keadle .85–.06
Discipline of Prayer.(1916) ……… .77–.06
Illustrated History of Music, by Lapper ……… 4.15–.12
A B C of Cooking ……… 1.10–.06
Songs for Quiet Hours, by Plante ……… 1.10–.08
A French Woman's Notes on the War, by De Pratz ……… 3.30–.12
Advice to a Wife, by Chavasse 55–.08
What a Young Girl ought to Know, (Mrs. Wood-Allen ……… 2.20–.12
What a Young Woman ought to Know, Mrs. Wood-allen ……… 2.20–.12

PERRY PICTURES sizes range from $5\frac{1}{2}$ X 8 to 19 X 23, prices from 5 sen to Y 4, copies of the world famous paintings done in sepia and in black and white, appropriate for Christmas Gifts.

東京 **教文館** 銀座
(電話京橋二五二二) (振替東京一一三五七)

前付五

前付六

女子青年界

第十四巻第五號

五月號

大正六年五月一日發行

エホバよ汝は我をさぐり我を知り給へり、汝は我座るをも立をも知り又遠よりわが念を辨へ給ふ、汝は我歩むをも我臥をも探り出し、我諸諸の途を盡く知り給へり、そは我が舌に一言ありとも視よエホバよ汝は盡く知り給ふ、汝は前より後より我をからみ我上にその手を置き給へり。（詩、百卅九〇、一―五）

我父母われを棄つるともエホバ我を迎へたまはん。（詩、廿七〇、一〇）

エホバ我磐わが贖主よ、我が口の言わが心の思念なんぢのまへに悦ばるゝ事を得しめ給へ。

（詩、十九〇、十四）

會說

神偕に在ますの信念

河井道子

一陽來復、東都の花の都となりし四月は、人の心も浮き立ち、雅俗の差別なく花の名所を浮れ遊ぶに忙はしい好時節であります、殊に九段坂上なる招魂社の朝日、夕日に匂ふ櫻花の美麗しさは又一入であります、加之月の下の夜櫻は俗人にさへ詩歌を口吟ましむる程の美觀で御座います。されば日中は學校或は事務で忙はしき者は夕方や夜分に社內の櫻見にと多數で出掛けますが、時々社內に閉ぢ込められ出口に困つたなどゝ云ふ事を聞きます。何故その樣に警護嚴めしく夕方早くより門を閉ぢ、兵士の護衛が必要かと聞きますと、密會者が屢々ありまして神聖な招魂社を汚す故にと聞きまして尙更驚かずには居られませんでした。聖書に「神を信ずる者には凡ての物淸く、信ぜざる者には凡ての物汚れたり」とありますが實際の事で、詩人ウオズオースの如きは

一本の野末に咲ける花にさへ
深き心に涙ぐまるゝ

と歌つて居ります。彼が水仙や野菊を歌ふた詩などは鴻大無邊な神の力と、其美とを賞讚して止まないのであります。彼の如き自然界を歌つた敬虔なる大詩人に此怡蕩たる春の日招魂社の櫻花爛熳たるを見せたなら如何に幽麗、壯嚴な詩を歌ふ事でありませう。然るを神を知らない野卑なる者は神聖の意味元より解せず、優美の念の如きは皆無にして只邪念、邪

慾の罪惡に包まれし魂でありますから、神聖なる場所を汚す如きは意とせざる處であります。溯つて舊約時代の物語を見ますに、アラビヤの平原を通過したヤコブは物凄い處に只一人石を枕に休みし其夜、天より地上に梯子懸りて天使の其上に往來したといふ物語があります、彼は翌朝目覺めて「誠にエホバ此處に在すに我知らざりき、畏るべき哉、此處、是即神の殿に外ならず是天の門なり」と云ふて居ります。又モーセが羊牧をして只一人寂寥き山奥に居りました時、不思議にも傍なる芝が燃え出し其中より聲ありて「此に近寄るなかれ汝の足より履を脫ぐべし汝の立つ處は聖き地なればなり」と。斯く人跡絕えし野獸の住家なる砂漠や山奥にさへ神が在し給ふ故、身に於ても心に於ても場所をけがす勿れとの御敎が此物語に活躍して居ります。其外子供の事を引照すれば近頃繪葉書で非常に人にもてはやされ、よく額などにしてある子供の祈つて居る畫があります。如何にも神々しき男兒が寢卷姿で寢臺の傍に端座し光明輝く一方を凝視て居る姿であります。是れはサムエルと申す大先生の幼年時代の經驗として有名な物語を示したものであります、此人は今日普通の言葉で申しますと子供の時に寺に遣られ、そこで修業の身となつたのであります。想像するに物淋しき場處に戶も壁も傾きかけた寺院で老僧のエリは聾ですからサムエルの友達といふ者はなく衣食住も皆不自由でしたらう、或眞夜中に神の「サムエルよ〳〵」と呼び給ふ聲を聞き「我茲にあり僕は聞く語り給へ」と御返事をした其姿が即ち其書であります。是等を思ひ合せると詩篇第百三十九篇に「神在さゞる處なく知り給はざる事なし」との深き信仰が湧いて參ります、只に彼處の山、此處の谷又は神社佛閣、教會のみが神の存在し給ふ處でなく、我々の敎室、會社、事務所、工場、己が寢室、我が身體にさへ神は在し給ひ、神見給ふのであります。ポーロは是を普通の人以上に感じ「我生くるにあらず基督我に在りて生くるなり」と叫んで居ります。私は常に神の遍在を

譬へるに空氣を以て致します、此地球を包容しつゝある空氣が、小く云はゞ皮膚を通してさへ身體に入り込んで居ります、水の中にさへ空氣は通ひ、花の莖、木の葉全て有とあらゆる物に空氣の當らざる物又浸入ざる物がないのであります、是が恰かも神が凡ての物をみそなはし、又凡ての物の中に居給ふに譬へて稍眞理に近いかと信じます、此信仰が各自にありましたならば如何して汚穢れた行爲、汚穢れた言葉を敢て爲し得る事が出來ませう、汚穢れた思想さへ抱く事が出來なくなる筈で御座います。古人は「君子は一人を愼む」と申しましたが我々神の子たる者はそれ以上でなくてはなりませぬ。神の御前に常に在ると思へば從つて愼まざるを得ないのであります、是を信ぜず、或は忘るゝ場合には如何なる惡をも斷行し得る者となります。斯く申しますと一方の人々は如何にも神樣は警察の巡査、探偵の樣に思ひまして只恐怖の念に滿さるゝのみであるかも知れませぬ。世には無教育な親が其子女を劫かし「斯う〳〵すれば何々の神樣の罰を受け、目が潰れるとか手が曲るとか、徒に神々を引出して子供を教へ樣とする間違つた仕方を繰り返して居るのが多數に御座います、斯る觀念を吹き込まれた子女は、神と云ふ者は有り、其神が凡ての事を知り給ふ者であるとは心付いても、只恐怖の念のみで少しもその神を敬愛する如き觀念の湧く筈はありませぬ。基督者の中にも是に似た信仰を持て居る者が往々御座います。正義の神にして人を裁き、其罪を罰し給ふ丈は深く悟り得ましても、其神が基督の説かれし如き愛の神たる事を忘れ、從つて自分達も人を裁くに、正義の物指でのみ計り、同情、慈愛、寛恕の分子が少しもない樣な場合があります。我々の凡てを知り給ふ神は只に惡を罰せんとし給ふのみならず、人を愛して善行を奬勵さんとして努力し給ふ父なる神であるといふ事を忘れてはなりませぬ。そうなりますと自分がよい事をして誤解されても神樣は凡てを知り給ふ故先づ安心であると平和を感じ、人目に止まらぬ處にても正義を

行ひ、嘸神が是丈の努力に對してどれ喜んで下さる事と信じて尙正義に進む樣になるのであります。

私共、此春、期學生ならば新學期を迎へ、又花嫁ならば新家庭を作り、又職業に就く者は新生涯に入りました此時に、何事をするにも神我等と共に在し我等と共に働き、共に悲しみ、共に喜び給ふ事我等の親、兄弟、親友以上であるといふ事を深く信じて日々を送るならば、勝利の生涯に入り得た者であります。

紀元六世紀頃佛國の新教徒が迫害を受けて洞穴や奥山に隱れて歌つた有名な讃美歌があります、その大意を左に紹介致します。

「我に親しき友あり、常に彼れ我を愛して止まず
　彼の近くに在らん事を我願ふ
　されば我等共に住むなり、我主を我と。
我饑え疲るゝ事屢々なれど、彼我手をひきて
　光の道に導き給へば、我等
　相携へて共に歩む、我主と我と。
我が喜樂、悲憂、苦慮、辛苦、凡て
　彼は知り給ふ心に殘る隅もなく
　語り合ひつゝ勵ますなり、我主と我と
彼世に來り、人を罪より救はんと己を捨てし
　其愛を悲しむ人に告げばやと
　夜晝我等は共に働くなり、我主と我と、
彼軛を我にかけ給へど其荷は輕く、軛は易し
　彼と共に働く我うれしさよ、我等は互に
　軛も荷をも分かつなり、我主と我と」

神偕に在ますの信念は、人間を眞面目にさせる唯一の道であります。此信念さへ確とあらば、働も嬉しく、休憩も樂しく、福利好運には榮を神に歸し、疲弊困苦には神の恩惠を思ひて反省し、誘惑に勝ち、活氣を養ひ得て餘りある事でしよう。徒に花が咲たとて浮れ出し、月がよいとて巫山戯たり、闇であるとて猥な行爲を敢てしたり、聖所を犯す如き事なきのみならず、且て汚穢た場所を聖化し得るの力を與へられます。

變らざる救主基督

救世軍大佐　山室軍平

耶蘇基督は昨日も今日も永遠も變らざる也。ヘブル書十三章八節、昔から多くの人が益を受けた此句の意味は如何なる事であらうか、先第一に基督は普通の人間でないといふ事である。或人は基督は大層立派な人であつたといふ、又或人は立派な教師だと思ふ、或は偉大なる事業家だと云ふ、成程基督の人格には一點の非難すべき處がなかつた、又死後二千年の昔から今日迄人を導いて居るのを見ても實に立派な教師に違ひない、又事業家としても、これ丈けの救の御事業を完成なすつた彼は類のない事業家である、然し我々から云ふと偉大な人格、教育家、事業家だといふ丈けでは足らない、特別の意味に於て神の子といふ處迄云はなければならぬ、基督は世界の始めからあつた者で今尚存在して居られる、基督は神の子である。偉い先生だと思つて常に基督に從つて居た、弟子達がソロ〳〵基督は如何なる方であるかと奥の手を知りかけて來た時に彼は弟子達に向つて「お前達は私を何だと思ふか」と御問ひになつた時にペテロは直に「汝は生ける神の子なり」と御答へをした。其時彼はペテロに向ひ、その返事は汝自ら考へたものではない、神の靈が汝に示したものであると仰られた。私共の信仰の土臺もこの汝は神の子なりといふ處迄行かなければならぬ。「我に挺を與へよ、さらば我世界を動かさん」といふた人がありますが我々は既に基督といふ挺を持つて居るのである。

基督が十字架にかけられた一つの原因は「私は特別な人間、即神の子である」といはれたからである、或人は彼が神の子であるといふたのは、人心を治める爲の一の方便ではないかといふ人がある、猶太といふ國では昔より神は一人であると信じて居る、神といふ字が本に書いてあつてさへ、恐れ多いといふて其處丈け除けて讀むといふ程の國である、それ程神といふ者に對しては敬虔の念を持つて居て、神を汚す者は石にて打ち殺すべしといふ掟があつた程嚴しい國であつた、それだのに基督が若し只單に譯もなく人心を收攬する爲めに神の子なりと云つたとすれば是程拙劣な方便はない、もつと他に幾らも適當な方便があるのである、方便といふものは人の心に傾合する樣な事でなくてはならぬ、神の子といふ事は決して猶太の人々の心を喜ばせない、恐ろしく不敬な者として罪人扱にされ、終に十字架に迄かけられたではないか、何で之が方便といはれ樣。チヤルスラムが或時人々と座談中、若し玆にダンテが來たらどうする、と聞かれて「若しダンテが此席に來たら直に席を讓つて上座に据える」「それぢやセクスピヤが來たらば?」「矢張席を讓つて上座に据える」「若し基督が來られたら?彼は襟を正して「其前に跪き禮拜する」といふたそうだ。種々立派な人があるが禮拜する人物は基督以外にはない、昔デンマークに一人の彫刻家があつて基督の像を作つた、それが非常によく出來て居るといふ事で多くの人がそれを見に行つた、するとその像が何處に目を付けて居るか分からない、遠くからながめたり、横から見たり、正面から見たりするがどうも分らない、最後に跪いて之を見上げた時に其目は正當に自分の顏をヂッと見た、それで其像は跪いて見るべき者である事が分かつた、基督を見るに我々は遠くから眺めたりしては分からない、其足下に跪いて禮拜しなければならぬ。彼は全く普通以上の人、即神の子である。

第二に同じく「昨日も今日も變らない」と云ふ事に就て、世間の物は皆變るのである、人間萬事流轉の

世の中、昔ギリシャの哲人は谷川の流に足を浸して直に水から足を上げて云つた「今私の足に觸れた水は再び返らぬ未來永劫歸つて來ない」と我々凡人には水はいつも同じ水が流れて居る樣に見えるが、實は變つて居るのである。

飛鳥川昨日の淵は、今日の瀬となる。

と凡ての物が變化して居るのである、奢る者久しからず、といふたら或人が、奢らざる者も久しからず、といふたといふ話がある、人の社會、家、心迄が變化する。一つ變らぬ物は基督計りである、有難い事である、千萬年經つても變らないから心强い。英國のヘンリー八世に仕へたウルゼーが王樣の寵を失つてから死に臨んでの言葉に「今迄王樣に盡した樣に神樣に盡したならば此樣な白髮頭になつてから捨てられる樣な事はなかつたろう」と慨いたといふが、實際此世に變らぬものは神計りで、命がけで賴みにして居る人からも往々裏切られる事がある。ルーテルが宗教改革をして居る時、或時非常に失望して、もう根も力も盡き果てたといふて落膽して居た時に、彼の妻は黑い喪服姿で彼の部屋を訪れた、ルーテルは驚いて、何故喪服を着たかと問ふたら、答へて「神樣が崩御になつたから」と、彼は非常に驚いて、お前は神樣が死ぬと思つて居るか、神樣は永遠に存在し給ふものである、といふた。妻は之を聞いて貴君が若し神樣が永遠に生きて居られると云ふ事を御存じならなぜ其樣に失望して居られるか、貴君が其樣に失望して居られるのは神樣が御崩御になつたのだらうと思つてそれで喪服を着たのである、神樣が生きて貴君と共に居られるなら、なぜ其樣に失望するか」といふて良人を勵ましたといふ事である、昨年小學校に上がつた私の男兒が　明治天皇の御崩御になつた當時の或朝非常に長く祈禱をして居た、それで私の妻は不思議に思つて「何を長く祈禱して居つたの」と聞いたら「ブース大將も死ぬし、天皇樣も死ぬし皆ゑらい人が死んで仕舞ふから神樣が死なない樣に御祈禱をして居たの」と答へた。幸にして我

我の神樣は死なゝい神樣である。
第三、尚一歩進んで基督は過去、現在、未來に亘つて我々に凡てなくてならぬ物を與へ給ふ方である。我々の心を苦しめる罪咎を帳消にして罪のない者として下さる、其他あらゆる物を滿し給ふのである。心配といふ者は取越苦勞が多い、心配が出來たらば直に基督の許に行き是を訴へるのである、ジョージ、ミュラーは何等金を持たずして數千人の孤兒を養つた、彼は先年歿したが彼の寫眞がのつて居る小さきカードには、神樣は昔も今も變らずに孤兒を養つて下さるといふ事が書いてあつた。親、兄弟にも話されぬ樣な心配が出來たなら直に基督の傍に行つて訴へればよいのである、彼は時にあつた適當な恵を與へて下さるのである。昔江戸に饑饉があつて食物がなくて困つた時に或人が一富豪の令孃に多くの人が困つて居る事を話して聞かせた、すると其娘は「それぢや皆家に千兩箱の一つ二つない人なのだろうね」といふたそうである。世の中は千兩箱のない人許りである。かゝる人には人の困苦が分らない。神樣は入用な者は必ず與へて下さるのである、神樣は電話をかけて呼ぶ必要はない、手紙を書く事もいらない、只其場に我々と共に居る神樣に訴へればよいのである。奇蹟は過ぎ去つた時代に計りある物ではない、岡山にある一銀行家は職をやめて後妻子を家に置いた儘一人で勝手次第に遊んであるいて居た、妻子は家にあつて常に未信者の彼の身を察して祈つて居た、或時彼は横濱から海路岡山へ歸る途中、夜中眩暈がして甲板の上から海の中へ眞逆樣に墜落た、幸にして怪我はなかつたが氣が付いた時には海の中に沈みかけて居た、彼は平常少しも泳げないのである、故に沈むのが普通である、彼はなまじ藻がけば沈む、人間の身體はぢつとして居れば浮くものであるといふ事を聞いて居たのでぢつとして居た、すると幸にも首から上丈け水面に表はれてからふじて生きて居たからうして一晝夜海にたゞよつて居た、其時彼は今迄妻子の進めも餘所にして自分計り勝手な事

をして居た事を悔ひ、神に對ひ「もし生きられるものなら助けて下さい、殘りの生涯はみな神の爲めに捧げる」と厚き祈禱をしてすつかり悔ひ改めた、丁度其時向ふから一艘の舟が來て其叫び聲をきゝこれを助けた、すると前に彼が乘つて居た船では船客が一名足らないので大に驚き名薄を賴りに其郷里へ打電した、家では妻と娘か毎日父であり良人である人の身を氣遣つて神樣どうぞ無事に歸國する樣と祈つて居た甲斐もなく溺死したのかと思つて悲嘆の涙にくれて居たすると、又電報が來て助かつたとの知らせであつた。其後彼は無事に郷里に歸り、神樣に海中で御約束した事を實行して殘りの生涯は岡山孤兒院に捧げ隨分よき働きをして、今はもう老年になつたので職を退いて居るが母子の祈りは終に父を導いたのである。

　此話は實際あつた事であります、私共は如何に神が我等の祈禱を聞き給ふたかといふ事を知る事が出來るのである。

我々は下らない事を心配しないで眞面目に此聖句の意をさとり、神に依れる生涯を送らなければならないのである。（文責記者）

春が來た

トマス、カール作
袖山愛子譯

冬ははや去つた、地は白妙の衣をぬいで
霜はもう草に凝らない、　白銀の湖水や
影うつす、いさゝ小川の薄氷も解けた。
麗かな春の光は、寒さに凍る地を暖ため
燕を死より甦らせ、空木の宿に時島と、小蜂を
眠から覺ました。
　今や若き春は百千鳥の歌聲と共に
　　花やかに再び此世に歸つて來た。

東北の三月末

河井道子

高峯讓吉博士夫妻の送別大宴會を中座し帝國ホテルの別室で衣服を替へ、俥を上野停車場に馳せたは三月十七日の夜十一時半、誰しも用事多きにや汽車の込む事甚だしく、翌日の責任を思ひ休息の必要を感じ寢臺車に移るも反つて靈肉上の經濟ならんと給仕に其由を告ぐるに、此列車には寢臺車なしと斷られ貧乏幹事には斯る奢侈は愼めよとの天來の聲と思ひ、煙草の烟朦々たる車內の一隅に身動きもなし得で一夜を送りぬ。

十八日、朝六時半郡山附近の松川驛に下車す、四邊の田畑に結べる薄氷の下に雪の解け始めし水音も長閑なり。三里を俥にて馳せ、川俣町に着きしは午前十時過ぎなり。此の地には會員田丸よね子氏が早くより女工等の爲め女子青年會を開き傳道の傍手藝を敎へ、親睦を計り、風儀の改善等を計らるゝの地なり、此處は輸出羽二重の產地にして目下人口七千四百廿六、戶數壹千三百三十九、工場大小共百五十女工數壹千壹百七十四名なり、中古より機織の盛なる處として有名なれば此土地に生るゝ子女は先づ一度は機織女工となると如き習慣もある由、斯る土地に於て田丸よね子氏の如き信仰ある婦人が全心全力を盡して青年女子の間に熱心なる傳道的活動は基督敎社會の譽といふを得べし。午後より電燈會社の大廣間にて婦人會を開く、八十名以上の來會者ありて其內の大多數は女工なりしも嬉し、其夜は田丸氏宅なる女子青年 會 館にて傳道集會を開きたるに、半

數は男子にして而も町內の有力者も來會したる由なれば、彼等が平素田丸氏に對し尊敬と好意を抱き居れるを窺ふに足る、傳道の如何にもむづかしき場所柄とて既に十年以上も講義所の存在すれど信者の數、十名に滿たず、是も受洗者にして轉居し又は除名せられしもありとはいへど新入者の少數なるは如何にも遺憾に堪へずと牧師は嘆息されゐたり。然し又斯く永の年月傳道されし此地に落ちし種の成長する時機を思ひ、倦まず、ひるまずして勇氣と勉勵とを信仰に加へ傳道の步調を進められん事を願ひて此地を去る。

十九日、十人に滿たざる全教會員に見送られ、田丸氏に伴はれて伊達郡伏黑村に赴く、玆には小野昌雄氏とて熱心なる青年信者あり、又永年米國羅府にありし美以教會信者小野某氏ありて熱心に此村の傳道に協力せらる、兩氏の發企にて午後小學校內に集會を開く。關西地方にて小學校內に講演の依賴を受けし際は絕えず言語の自由を束縛されし心地したれど玆に於ては遠慮なく思ふ儘を述べよ、との所望を受けたり、來會者は主に其土地の婦人にして公堂に溢るゝ計りの盛會なりき。此村より二百名餘り海外に移住せる者ある由なれば、米國に於ける農村の宗教、教育、風儀等に就き語るも彼等よく理解し得たり。午後夕刻より隣村長岡に行く。此地は今より卅年以前押川氏の傳道されし處にして夙に教會の設立され、或家庭の如きは三代續いて信者なりといふ、即祖父母の時代よりの信徒にして今は孫達の教會に出入するの時なり、然れども交通不便にして他よりの刺戟少なければ從つて傳道も固定し進步的なる活動を見ずと信者等の語らるゝを聞けり、佐藤儀四郎氏といへるは此地の素封家にして信仰厚く、東京にも其友人を多く、現に男子青年會の主事、小松武治氏は氏の親友なりとか、されば常に青年會の如き事業に多大の同情を寄せらる、氏は製糸場主にして女工寄宿舍には菊地武治牧師殆んど毎日訪問され個人傳道に努め時には講演會を開き廣く彼等を指導

さる、此夜寄宿舍にて「感謝」といふ話題にて一同に語る。此處より卅町にして飯坂溫泉あり、會後雨中を飯坂に急ぎて一泊す。

廿日、小野、田丸兩氏と共に旅館にて早朝祈禱を開き、後彼等の見送を受けて九時の汽車にて仙臺に赴く、突然宮城女學校を訪問したれば一同の驚き限りなし、玆にて來るべき夏期修養會に就き打合せをなす、同校は六月の末終業なれど原田ことち敎師の如きは一ヶ月も居殘りて修養會を助けむとの厚き同情を示されたればうれしさに感謝の言葉もなし。

敎頭早坂先生は昨年來病氣にて半ヶ年も入院されしが幸ひ快方に赴かれ出勤され居りしも未だ全快といふにあらざれば御疲勞の樣子見えたり。然し元氣中々旺盛にして欣然たる御顏色に接せしを喜び、急ぎ停車場に歸る、同夜九時半盛岡に着し、タピング夫人の家にやどる。

廿一日、遠近の連山皆雪にして、庭にも又道の邊にも雪尙堆積せり。朝より頌榮幼稚園卒業式準備にて敎師方は多忙なり。同園はタピング夫人の創立にして夫人は園長として縣下に芳名あり、抑岩手縣下には幼稚園たるもの此園をさきて他になし、盛岡市內にて主に上流社會の子女此園に集る、午後一時半より卒業式あり、兒童等の父母多く來會す、東京市內幼稚園の卒業式等には母姉等の參會者あれど父兄等の出席稀なるにこゝには家族總出かと思はるゝ計り男子の出席者多數なるに驚嘆せり。是れ、彼等の敎育に熱心なるにも由來すべけれど必ずや園長及保姆等の市民間に信用厚き故なるべし。室內の裝飾は如何にも珍らし、紙に包みたる繃帶に赤十字の印を付し是を部屋の四方の鴨居より吊り下げ、天井の中央より繃帶をリボンの如くにつり下げ四隅にて是を結び、柱はガーゼにて卷き、見るもの皆白く、其間に西洋及日本の人形に赤十字帽を被せたるを飾り付けたり。又一間半の床の間を人形の病院とし、寢臺を十臺計りも据え、こゝに人形病人を寢せ、各寢臺の兩端に一人宛の看護婦と付添はせたり、しかも一

人は西洋人形、一人は日本人形なる趣向も面白し。其外に西洋及日本の醫者、全病院を看守する樣なり病院の中央に某婦人より寄贈されし美しき白き花の鉢植あり四邊を賑はす大人も子供も共に皆此模型病院をながめ、先生方の趣向に感じ入るの態なりき。タ夫人は一同に說明さる樣、此幼稚園は基督敎主義にて設立され、常に聖書の話を基として敎へ、奉仕の念の涵養につとむ、且只に己が家庭我國と奉仕を制限せずして世界的奉仕を奬勵せんとする方針なれば今回は生徒に世界大戰に際し赤十字事業の人道的なるを說き聞し、兒童の力に依りて繃帶二三百個を製して是を英國皇后陛下主催の赤十字支部に寄送せんとする處なり。されば今日の裝飾も皆是に因みたるなり。と園長が斯く世界的奉仕の觀念を頑是なき兒童に涵養しつゝあるを以て間接に彼等の家庭に及ぼす感化は偉大ならん、さればこそ斯く多數の父母兄弟が興味を以て卒業式に出席せられたるなれ、と獨り肯首かる。開會に後るゝ五分計にして知事閣下の臨席あり、之を以ても如何に此幼稚園が重視せらるるかを知るに足べし。知事より子供等に挨拶ありたれば一同の喜ぶ事限りなし、若し他縣に於ても岩手縣知事の如く眞心より敎育に同情を持ち公私の別なく大小學の區別なく敎育事業に奬勵を與へられんには其當局者及家庭に及ぼす功果は如何に大なる事ならん。其夜タ夫人は知事夫人を始め八名の婦人方を招待して夕食を共にせり、打解けて樂しき會合なりき、同席されし太田いく子氏は益々血色美はしく、熱心に縣立高等女學校に敎鞭を執らる、互に語り合ひ度き事數多かりしが時間なく近き中に再會を約して別れたり。

廿二日、終日車中、東北の春尙は遠き心地して午後五時四十分弘前に着く。岡本みどり氏を始め數名の人々の歡迎を受け弘前女學校に至る、竹中愛子氏も同校にて裁縫を敎授され、益々元氣に滿ちたる御樣子なるも嬉し。

廿三日、弘前女學校第二十二回卒業式をメソヂス

ト教會に開く、此教會は故本多庸一先生の創立せられしものにして、今日迄其會員中より八十三名の男女教役者を出せしとは驚くべし、當日市長の祝辭及校長ラセル先生の告辭に次で「成長」といふ題にて卒業生に奬勵するの光榮を負へり、午後一時より同窓生に一場の講話をなして後再び教會に行く。婦人會と矯風會との聯合にて盛大なる集會を催されたり、司會者高谷とく子夫人は函館遺愛女學校の早き頃の出身者にして才徳共に備はり弘前市にて衆人の人望を擔はるゝ婦人にて、加ふるに信仰あつく、常に婦人會々長として又其他一般婦人の指導者として活動さる、數年前長女御永眠當時の御感想を寄せられたれば本號に於て讀者に紹介せん。

廿四日、托兒園を參觀す、是はメソヂスト教會の事業なれど縣及市よりの補助あり、貧民勞働者の兒童を毎日午前九時より午後九時迄預りて彼等を教育す、二人の保姆全責任を負ひ四十名以上の子供を教育する其功績著し、此園の創立は今より四年以前東北地方饑饉の時にして最初は一時貧困者を助くる目的なりしも、成績良好なりし故を以て人々より其經續を申込まれ、終に今日に及べる由、時を得て他日委しく此園につき紹介せん。其日午後青森に行く、五時の汽船にて函館に行かんとせしも、暴風雨にて便船なし、一日待ちて天氣模樣を見んか或は直に歸途に就かんかと思案最中に暴風雨ます／＼加はり寒氣はげしく、停車場に居るさへ心元なし、遺愛女學校に打電し其返事を待ちて決せんとす、暫く旅館に行き食事を終へ返信を待つに夜半までも來らず、止を得ず此館に一泊す。

廿五日、朝五時頃起床、四邊を見るに窓一面白雪にて掩はれ詮すべなし、夜來の暴風雨尚ほ止まず、外出せんとすれど夜中の降雪一尺以上にして、停車場迄さへ人跡なし、漸くにして場中の人となる、函館よりの返信を見れば「船の出次第來よ」との事なりされど此暴風雨を如何にせん、係員に出船如何を問ふに「とても出船むづかし」といふ、歸るより外に道

なしと六時半の汽車に乘る、馳する事一時間計りにして汽車俄然に停止す、暴風雨の爲め電信、電話斷切して危險なれば進行なし得ずとの事なり、車内係員は一人徒歩にて次の驛迄途中視察に行く、二時間を經しも彼歸り來らず、又他の係員を出す、後にて聞けば以前に行きし者は强風の爲め吹き飛されたるなりとか、漸くにして汽車は徐行しつゝ二三哩計り進みしが又とゞまる、斯くして午前九時頃より午後八時過まで立往生の態なり、幸にして車中は暖かなりしも糧食の乏しく、近在より炊出を持ち來り乘客各自に結び飯二つ大根漬三切の饗應にあづかる持參せる手紙の返事又は調ふべき書物など充分に讀み得るの時間を與へられし心地して十二時間をこゝに過したるは感謝の一なりき。

廿六日、眞夜中と思ふ頃車掌の來りて一同を呼び起し盛岡に着したれば下車せられ度しといふ、玆にて汽車を替へる必要ありとの事止を得ず、眠き目をこすりつゝ足腰をなでつゝ乘客の下車する樣滑稽なり、見れば午前三時半、誰も〱寒氣に胴震ひしつゝ小さき暖爐を圍む、五時近くなりて再び以前の車掌來り、他に汽車のなければ以前の汽車に乘りてよ、との事に皆お互に笑ふのみ、再び手荷物等運びて後以前の場所に座して後一同言ひ合せた樣に哄笑す。此日午後二時半米澤に着き、上野俊子並に山田、相浦諸氏の歡迎を受け、再び雪の世界を車にて馳せ上野山田兩氏の宅に行く。此家は高等女學校に隣り合ひ草葺の廣くして古雅なる建物なり、板の間、廊下、何れも漆を塗しやと怪しまる迄拭き磨かれ、部屋〱の天井は高くして夏の凉さを思はしむ。相浦姉妹等は甲斐〱しく調理の任に當られ米澤名產の鯉の御馳走を饗應はれたり。食後山田、上野兩氏を始め卒業生等相集り共に祈り、共に語るの樂しき家庭集會を催す。

廿七日、雪降り寒氣强し、されど景色の美しき、とても都人の想像だに及ばざる處、十時より十二時迄再び家庭集會を開きしに若き青年女子の以外に多

く集まられしに驚きたり、皆熱心と眞心面に表はれ語る者も勇氣付けらるゝ心地す。午後より再び集會す、若き娘の一日に一回以上外出するを禁止せる習慣の此土地に神の道を聞かんとて再度も出席したる共勇氣賞すべし、斯る眞面目なる家庭集會を開は教役者に取りてさへ最大の努力と準備の必要なるを勞せずして、只山田、上野兩氏の熱心なる盡力に依り親しく青年女子に接し憶せず語り共に祈るの機會を與へられたるは此の上なき幸と感謝して止まず。これらを推しても此の若き二人の教師が米澤市に於ける隱れたる働は普通の教役者をして慚愧に堪えざらしむるものあり。上よりの祝福諸姉の上にあれ。夕食後市内の日本基督教會にて講演す。歸途空に星あり地上雪あり、四方に同志の友ありて此世は美しと今更の如く感ず。

廿八日、朝食後停車場に急ぐ、上野氏は春休みを利用し母校英學塾の同窓會に出席し、且友人等を訪問せんが爲め共に上京する事となり、又此春高等女學校を卒業せる鹿股氏は英學塾に入學せんとて上京、聖公會の牧師夫人も御上京との事、玆に一行四人となりて東都に向ふ、見送り人の數おほし。

雪の米澤市を辭して福島に來ればもはや春近き思ひす、追々南下するに從ひ春氣相增す、夜八時半東京なる家に着し上野、鹿股氏も一所なりしかば家内は俄に賑はしく、一同感謝の中に床に就く。(終り)

□

世の中は豆で四角でやわらかで
　豆腐のような人になれかし(古歌)

世の中に苦はなきものを我とわが
　樂を求めて苦しみぞする

植てみよ花のそだゝぬ里もなし
　心からこそ身は賤しけれ

上見れば思ひ出もなき身なれども
　我より下の人も多きに

安藤坂寄宿舍訪問記

袖山愛子

春風の面に暖い午後の日、女子青年會の事業の一なる寄宿舍を訪問する事に致しました。本會には第一、第二、第三と三つの寄宿舍がありますが、第一寄宿舍の方は舍監門倉藤子先生が御親切にも態々御近況を本誌三月號に御寄せ下さいました故、此度は小石川安藤坂にある第二寄宿舍の方へ上る事として、神保町から電車に乘りました。帶の樣に緩かに流れる江戸川を挾むで咲きほこる櫻花を眺めながら大曲で電車を捨て安藤坂を登つて中程の左側少し入つた處に「女子青年會寄宿舍」と書いた電燈の出て居るのがそれであります。清潔に掃き清められた玄關に立つて案内を乞ふと「まあ〳〵」といつて出て來られたは大西先生、舍監として常に深き愛と厚き同情に滿ちて舍生に親切を盡される先生のいつもながらのにこやかな御顏には慈母の樣に懷しさが溢れて居ります、私の問に對して隔意なき御答、—

「只今の處舍生は滿員で御座います、寄宿舍へ御入舍の方は一番職業學校と渡邊裁縫女學校の方が只今の處では多う御座います、皆樣至極眞面目に善く御勉强になります、學校に附屬した寄宿舍とは違ひますから一定の時間に一同揃つて歸舍し、一同揃つて食卓に就くといふ事は中々六ケ敷いので御座いますがそれでも規則を犯すといふ樣な事は御座いませぬ毎夕祈禱會があり日曜日の夕には牧師とか教師とかに宗教上の御話をして戴く事にしてあります、宗教の事を少しも御存じないで御出になつた方も入舍に

なつてより幾分か分かる樣になり此舍で播かれた種が成長して、終に世の中に出てから洗禮を御受になつた方も多くあります。基督敎の下に立つて居ります寄宿舍の事故此敎に就ては信者でない迄も反對でない者が入舍する事を希望致して居ります。勿論私は女子青年會の御趣旨に基いて及ばずながら監督の任に當つて居りますが私が此舍に居ります者に望む事は、どうか皆が宗敎的堅き信念を持つて自重心ある者となつて貰ひ度いのであります、種々な過失に陷つたり誘惑に掛つたり致しますのは皆餘り自分を輕視するからであります、物質的には獨立するに足る丈けの技能を磨き精神的には厚き敬神の念と萬難に打勝つの勇氣、健實なる希望を持つて世に立つ人となる樣に望みます、次に共同生活を爲す間に養ひ度い事は互に人の爲めに盡すといふ事であります、此精神は斯る寄宿舍生活には極めて大切な事であります只に寄宿舍のみならず凡て人の社會は我儘利己主義で幸福に送れるものではありませぬ、どうしても人は相互に己れに都合のよき事でも人の迷惑になる事は愼まねばなりませぬ、此精神を養ふには斯ういふ寄宿舍は最も適當で御座います、私はこれを養ふ樣に注意致して居ります。

私は先生に御願ひして寄宿舍の御樣子を見せて戴きました、讀書室、食堂、御風呂場と奇麗に片付いて氣持がよく、階上は舍生の御部屋にて一間の廊下を中に兩側に西と東に並ぶ部屋の數々、皆好く御掃除が行き届いて、皆樣共同一致の精神が窺はれます、御部屋は風通しもよく高臺の事とて見晴は此上なく江戸川の彼方も遥かに眺められます。

此舍に樂しい清い朝夕を、優しい舍監先生の下に送らるゝ舍生方の幸福は如何計りかとひそかに心からお喜び申上げながら再び事務所へ歸りました。

悲しき日

高谷とく子

世の罪を一身に負ひ給ひて、十字架の死をさへ厭はざりし主イエスの御臨終に「晝尚ほ遍く地の上暗黒となれり」と、神の御獨子の萬民に代りて受け給ひし苦痛を天父のみそなはすに忍びなかつた標ではありますまいか。

「父よ、若し聖旨に叶はゞ此杯を我より離ち給へ、されど我意にあらず、たゞ聖旨に任せ給へ」とゲッセマネの園にて血の汗をもて祈られし主の御心と共に、十字架の眞意の幾分を近頃漸く味ふ事が出來ました。

思へば明治四十五年にて、又大正元年八月五日には一刻も忘れ難き我家に一大悲劇の起つた日であります。其時の心中とても言葉に言ひ顯す事が出來ません。最初の診斷にて我子の重病なる由を醫師より告げられし時は、天地も忽ち一變して、日の光さへ我眼には暗く、實に斷腸の思ひとは此事ならんと「昔日ラザロを甦へらせし主よ、我子の上にも御力を顯はし給へ」と祈りました。友人よりの慰問狀に對しては「世は暗く悲哀に充てり」と返事する外何事も言ふ事が出來なかつたのです。床に就く事一ヶ月最終二日間の樣子は今も尚時々頭腦を往來し、是が涙となり、又慰安とも力ともなるのであります。

思へば去年の六月廿八日、久々にて歸省せし彼女を迎ふる爲め停車場に參りました、二三學友と同車して居る筈の彼女は只一人下車致しました。嬉し涙に曇る眼を見らるゝもおかしと暫く側を見樣とする

と「あゝ嬉しかつた、お母さん、今日の御迎はきつとお母樣だと思ひました、青森迄誰々さんと一處でしたが乘替の時皆さんは中々呑氣ですし、私は一刻も早く家に歸り度いと思ひましたから一生懸命急ぎ足で列車に入ると間もなく私一人を乘せた限り、氣笛の聲と共に發車して仕舞ひました、氣の毒やら嬉しいやら」とさも一大奇蹟でもあつたかの樣に誇顏にて語るのでした。

「お父樣只今歸りました」父は暫く彼女の顏を見て居ましたが「流石のお多福も少し肉が落て色さへ白くなつた樣だ」と病の兆ある身とは心付かづ嘲弄ますと「左樣ですとも、私だつて十九の娘盛りですものと負けずに冗談を言ひ返し直樣行李を解きながら「昔の我宿、變らぬ故郷、夢の他に今日ぞ逢へる、日暮し秋呼ぶ榎木の木蔭に親の笑顏見んが爲よ」と口吟さみつゝ「あゝ我家とは何と心地の善いものでせう、休暇になつて家に歸る樂しみは何とも言はれませんよ」「此樣な狹苦しい借家住居でもか」と母が問ひますと「お母さん、スヰートホームの味はそんな處にはありませんよ、殊に近い中に新しいお家が出來上るのですもの、暫くこんな處に假住も又面白いものですよ」と。其日晝食をすまし風呂に參りますと、幸ひにも私共二人限でした「お母さん、弘前の湯は又別段ですよ、何といふよい氣持でせう」と彼女は久々にての歸省、何もかも愉快と滿足に充されたのだした。

其夕、父は所用ありて外出し、私共二人と甥と下女皆一室に集り色々の物語に彼女は其夜の主人分を氣取り、語りもし、歌ひもし、果てはオルガンを彈き、旅の勞れも忘れて、悅び居る其樣、見る親心一層嬉しかつたのであります、餘りに勞かれやせぬかと思ひ「初惠、もうお舌喋は止めて、少しお休みなさいよ」と言はれて初めて笑ひながら、燈火の下に座しました、暫らく下を向ひて居た彼女の顏は、不思議や其刹那、母の眼には青白く淸らかに、然し淋しい棺中のそれの如くにうつり、恐ろしい念に打

たれました、嗚呼、達者で歸省した我子を見るのに何たる迷夢よと自ら叱り付け、何氣なく又も話に移り其夜は眠に就きました、翌日は安息日にて教會に出席致しました。彼女は例ならば早速お友達の側に席を取るのに其日は矢張母の側に座を取りました。是は此世にて神の教會に出た最終でありました、例ならば家に歸ると早速友人を訪ね廻るのに、僅か幼少からの親しき一人の友と、彼女の教師なりし人にて、卒業後も常に妹の如く愛しみ呉れし此二人を訪ねしのみにて、何處へ行くよりかも家に居て兩親の顏を見るは何より樂しみなりと引籠つて居ました、四五日過ぎると發熱があるので幾分か不活潑でした、風でも引いたのだらうから病院へ行つて兎に角藥を貰うてと七月六日に初めて診察を受けたのであります、院長は何も言ひませんで「今晩何誰か私の宅へ御出下さるやうに」との挨拶、私はやゝ不安に思ひましたが親しい中でもあるし僅計りの事に念を取ての爲ならんと思ひ直して歸宅致しました、

「お母さん、院長さんは私の前で何も言はぬ所を見ると病氣は惡いのかも知れませんよ」と其晩父は所用ありて外出し私は案じられました、可憐なる彼女は容易ならぬ狀態にあるのであらうと、漸く院長の語るを聞けば果して彼女は急性肋膜肺炎に罹つて病勢重態なりと、呵々意外、意外、誕生以來嘗て病ひを知らざりし彼女は今や醫藥も困難と思はるゝ疾驅性のものに侵さるゝとは何たる不幸かと、心密かに驚き彼女を都に出だせしは過かと、胸張り裂る計り、果ては此身も失敗の母なるか、萬事止みぬ、と躊へる足も力なく、家に入れば、極めて樂觀せる我子の間に「お母さん院長さんは何の病氣だと言ひましたか、肺でも惡いとは言ひませんか、私は別に驚きませんよ、胃腸の病氣をするより餘程高尚ですよ、胃腸では、さも食慾を愼まない樣で、如何にも下劣ですよ」言はれるものゝ若しやそれと告げたなら、定めて失望するだろうと思ひ、只輕き肋膜炎なる由を告げましたら微笑つゝ、それならば快復の望

があると、少しも心弱き様子もなく病にさへなほ滿足するとは訝しい程でした。醫師の命にて床に臥しては居るものゝ初めの程は、發熱時間の外は別に苦しみもなく讀書を樂しみ、極めて病氣には無頓着でした。近處に琴の師匠があつて終日彈く音の絕えぬをきゝ「お母さん琴の音を聞きながら、床に臥すとは如何にも氣分がよいではありませんか」と

日一日と病重り、醫師の注意もありし事故、更に廣き家を借り、引移りましたのは永眠前二週間程の事でした。廣々とした座敷を悦び「お母さん、臥しながら淸々とした庭園を見、麗かな靑空を眺めて居ると、自由に空飛ぶ翼が欲しくなりました」と頓て昇らん天界の美しさが彼女の心に映つたのでありませう。

此家も又隣は料理屋で、日々三味線の音八釜しく定めて厭ふだろうと思ひの外「お母さん、此處も又別天地で如何にも陽氣です」と何の不平もなく、不快なく、世を樂しみ生を樂しみ、病さへ尙ほ服從するとは不思議と思はるゝ計り、別けて臨終の様子は如何にも神々しく涙ぐめる母の顔を見るや「お母様弱い心を持つてはいけませぬ、お母さんも日本婦人ではありませぬか、私は死ぬものではありませんよ」と一點の涙さへもないのです、最終の日早朝「お母さん、とても今日一日我慢し切れませんよ」と暗に其日の永別を告げ、私も遂に斷念致しました、それ以上、一刻たりとも病苦を見るに忍びず「神よ今日此子の魂を受け給へ」と祈りました、其朝一回注射せし院長を今一度見度いと再三の請に依り、再び迎へましたら、さも嬉しさうに最終の注射を賴み「叔父さん、大丈夫ですか」「左様大丈夫です」との答へを聞き「そんなら嬉しい」と又側に居耐へず立ち上りし父を見「うちの御父さんは」と父は「此處に居るよ、何事も安心せよ」と言へば、うなづきながら靜かに唇を動かすを聞けば「凡て勞れたる者又重きを負へる者は我に來れ、我汝を息ません」との聖句を八回まで繰返し、續いて

「主よみ許に、近付かん、登る道は十字架に
ありともなど、悲しむべき、主上み許に近付かん
「主我を愛す、主に強ければ、我弱くとも
恐れはあらじ、　我主エス、我主エス、
我主エス　我を愛す」
「かみの秘め給ふ、處にかくれ、御助受くるは、
如何に樂しき、惡魔のたくみも世のわづらひも
知らずしてすぐる身のうれしさよ、」
「物は變り世は移れど、動かぬはみ國、いざや歌
はん我等共にとこしなへの歌を、いざや歌はん、
我等共に、とこしなへの歌を」

此四つを唱ひ終りて「眠つてはいけませんかとの問に「宜しい、眠りなさい」との母の答を待つて、うなづき、父母、親族、友人等に枕邊を取卷かれつつ、いと安き永久の眠に就きました。

あゝ我生涯の樂しみ、又望であつた彼女の世になき上は明日を如何に過さんかなど殆んど狂せん計にて靜かに聖旨のある處を學ぶ餘地なき程でした、近來健康すぐれぬ母を見て「萬々お母さんが死ぬ樣な事でもあつたら私は活て居られないなど〻、平常意氣地なき事を言ふ彼女は如何にして此樣な信仰の勝利者となつたか不思議に思はる〻程です、只聖靈の御働きの外ないのです。彼女の唱ひし如く「主我を愛す、主は強ければ我弱くとも恐れはあらじ」と此確信であります。短き十九年の生涯に信仰、希望、愛、この三つの寶を得て永遠の生命に移りました、不思議や、彼女の葬られし寺院さへ最勝院と申して、一種公園の如き景色の美はしく陰氣ならざる墓地は、東を枕に岩木の山を足にして常盤木の下に、其墓にさへ滿足して「お母さん、私は大丈夫ですよ」と耳底にひゞく心地が致します。

「常盤木の千歳に老ひせぬ姿の、夜暴風をしのぎ
し其秘密を問はじ、夏も冬も靜かに忍びて、ま
がに幸に、かしこむは、御旨、

「お母さんが數年前花の日に唱ふ爲めとて花ならぬ常盤木の歌を敎へて下された此歌をば、今はお母さ

んの爲に遺します」といふ様に聞えます。

夏、歸省毎に、父の注文の唱歌は、菅公、野末の伏屋、あはれ孤兒、などにて音樂の趣味に乏しき父も此三つの十八番には感極まつて幾回となく聞くのが常でありました、夏は幾度となく歸り來れど今は此樂しみさへ愁の記臆と變りました。

思へば、初惠歸省前、或日途を歩みつゝ異樣な思ひに襲はれた事があります、私は此家に嫁して今日迄廿餘年間、主人と私共と信仰を同ふする事を第一に次に我子の心身共に健かに生ひ立ち、神と人とに益々愛せらるゝ者とならん事、此二つの祈は曾て一日として怠らなかつたのであります。長い年月何が故に神は御答を下さらぬか、自分の盡し方に足らぬ事があれば是れ以上如何にしてよいかなど思ひ起しました、其時「汝は準備出來たるか、答を得ん爲めには最も苦しい事も忍び得るか」との聲、胸に響きました、私は考へました、何が一番辛からうかとあゝ何よりも我子を取らるゝ事が一番辛い事でせう、若しも〳〵そんな事があつたらば……と餘りの恐ろしさに心の耳を閉ぢんとさへ致しましたが、中々其問題は止みさうもありませんでした。遂に思ひ定めました、一人に貴い限りなき生命を與ふる爲めには獨子の生命をも惜むまい、と譬へ神は我子の肉體に死を降すとも彼女は既に永遠の生命を握つて居る、何の憂ふる處もないと自問自答の中に歩んだ事が有りましたが、圖らずも彼女は難病に犯さるゝや、思ひ起したは此事で、あゝ神はいよ〳〵御計畫を始め給ふかと心付き「父よ若し聖旨に叶はゞ此杯は我より離ち給へ、されど我が意を行はんとにあらず聖旨に任せ給へ」とゲッセマネの主の祈を繰返しました。

此一大悲哀に依りて人生の深き意味ある事を敎へられました、悲しみに沈み、淋さにおそはるゝ毎にいづこともなく、いと柔しき聲ありて「婦よ泣く勿れ、汝の子は死ぬるにあらず、たゞ寐ねたるのみ」と、故知らず涙のこぼる　如何ならん、

使命を帶びて地に下る身ぞ
母の乳慕ふにあらで此頃の
我が飢ゑ心地言ひ難きかな

是は歸省前の自作か、寫か解りませんが、死後寄宿舍より取り寄せた手箱の中に有つたものです。

（此記事は故初惠氏御永眠の當時、婦人新報に母君より御投書ありし由、去月河井幹事弘前にて同夫人に始めて面會したるに夫人に初惠氏より屢々幹事の事を聞き居りし由にて追懷の情禁じ能はずとて左の記事を御寄稿ありたれば玆に之を揭げたり）

震へる足を踏みしめて

水蓮

「暑い寒いも彼岸迄、もう暫くすると花が咲きますよ」と常夏の國から十幾年振りで東都の寒中に千切れる樣な水道の水を經驗した母を慰めて居たが、その花も滿開は既に四五日前に過ぎて、今日の雨では定めて色もあせて仕舞ふ事だらう。

「光陰は矢の如し」と云ふが、實に自分の樣に日々忙しく暮して居る者に取つては「矢の如し」といふ樣な耳馴れた言葉では、この日足の早さを表すには足らない樣な氣がする。

傾く月の影に人を恐れて臆病にオド／＼しながら此世に生れて來た自分はのんびりと日陽の花の樣に育てられなかつた。數多い惡い性質の中で最も自分を苦しめた物は、人嫌いな僻と殆んど極度に近い我儘であつた。人の世に住むに最も邪魔であるこんな重荷を負ひながら、臆面なく、空手で此暗い社會へと歩き出してからもう一年になる。未だ獨りで步けるといふのではない、先生や其他の人々に引張られて辛じて一寸二寸と進むのである、若し此等の人々から手を放さるれば其儘意氣地なくヘタ／＼とへたばつて仕舞ふかも知れない果敢ない、憐れな身の上である。

現在は勿論の事御覽の通りの仕末、未來とても果して一人步きが出來るか出來ないかは步いて見ないから自分にも分からない、然し私はどうしても步

かなければならないと心の中に確く囁く。一人立をするべき學識もなければ才能もない、何等取柄のない自分が斯ういふのは滑稽を通り越して寧ろ愍然であらう、愍然でも滑稽でも何でもよい、私は歩かなければならぬ、かすかな一道の光明を賴りにして……

心をすぼめて受ける毎月のアローアンスに安じて只譯もなく遊び暮すには廿才の坂を空しく一二三と數へ盡した身には其無意味な消日は物足らなくもあり又殘り惜しくもあつた、私は意義ある生活に憧れたのである、そして空手で飛び出してから一年も過ぎた。時々私は「自分の樣な缺點の多い、現在生みの親からも疎まれて居る樣な私を面倒見て爲すべき仕事を敎へて下さる先生や知己のあるのは何といふ幸福な事だらう、間違がつて生れて來た自分にも爲すべき仕事があるといふのは不思議の近い、神の御恩寵でなくして何であらう、天地萬物を造り給ふた神樣は呪はれて生れて來た自分にも祝されて生れて來た人々と同量の愛をそゝぎ「汝我が爲めに是をなせ」と重大なる使命を授け給ふのである、と思つては限りなき感謝に滿たされる、現在の私は幸福である、過去の生涯中で今日程幸福に暮した事はない、籠から放された小鳥の樣に身も心ものび〳〵して居る、限りなき綠の野を見渡して……

私の羽はまだ弱い、フラ〳〵して居る、物事に驚いてオド〳〵する、先生は「信仰を厚くして」と仰つて下さる。過去の失敗は常に私を前後左右より劫かして、不安は私の足元にからみ付く、倒れてなるものか、四邊は暗闇でも幸に目標の光明がある、側目もふらず、自分の足で一歩〳〵强く固く踏みしめて、轉ぶだらうか……ころぶなら大きくヅシンと地響を立てゝ……轉んでも只起きない、必ず何か摑んできつと起きる、步む、自分の足で、

私の家族は神樣と母と私の三人暮しだ。

（四月十五日）

THE HOSPITAL PHARMACY.

GINZA. TOKYO.

TELEPHONE SHIMBASHI 2334.



◎歐文和文處方調劑
◎歐米有名賣藥各種
◎舶來化粧品各種
◎醫療器械各種
◎舶來滋養品各種

東京京橋區銀座尾張町一丁目一番地

銀座藥品部

（舊聖路加藥品部）

電話新橋二千三百三十四番

弊店は正確誠實迅速を旨とし凡て責任を以て販賣致し候間何卒御用被仰付度候

壁上の十字架

アレキサンダー女史作
森田松榮譯

姉妹諸君、今日はよいお話を致しませう。それは小山の間にあるプリミエロからの傳説です。プリミエロといふのは人里はなれた小さな國で、姉妹諸君の氣もち次第で其所には、愛すべきもの、學ぶべきことが澤山あるのです。それは時といふ波からはなれて打ち上げられた船のやうに、この騒がしい世の中から餘り遠くはありませんが、併し、登りにくい高い所に位して居ります。

山々は綠や鼠色の壁でそれを圍んで居て、崖や林や滑りさうな絶壁が圍り、さまよふものとては、唯雲ばかりでした。

人々は其所に家を建てました時、神の祝福を願つて、戸の上に『主キリスト此所に住み玉はんことを』といふ祈禱を書きました。

その險しい坂路の、舊い邑の多くの人の心と多くの家とに主キリストはおやどりになつたことと私は思ひます。

重荷が堪へがたい時――そして隨分な重荷がみんなに來るものです――人々は今ここにお話する壁上の十字架の物語を話しあひます。これは朧ろに遠い過去から集めた智識の玉ながら、世界が續く限りいつも入用で、いつも新らしいものであります。世のはじめから今迄に、十字架から逃れられたほどの、幸な、又は賢こい、又は偉い人は一人もありませんでしたし、又この後も決してありません。

物語は、貧しくて、艱難にひどく苦しめられて居た、寡婦が、悲しみと繁い涙のはてに、その魂が何んなに祝福されたかと云ふことなのです。

彼女は前から貧しくて悲しみがあつたのではありません。彼女の青春は輝いて居て、幸な家と、慈しみ深い兩親とがあり、彼女は兩親の心のよろこびであつたのでした。母の寵兒、父の誇なる彼女は、姿

も顏もうるはしく、愛らしい愛嬌のあるしとやかさのため、みんなのよろこびであつた快活な少女でした。

やがて年若くて愛した人と結婚し、なほもよく保護されて居りました。夫は彼女の爲に勞し、彼女の爲に慮り、彼女には何の重荷もありませんでした。彼女もほんとに働きました、然し短い仕合せな時の働といつては、果樹園から木の實を摘つたり、園の花をいたはつたり座つて紡いだり、はなやかな薔薇の花を手にして椽先で時を歌ひ暮したり、子供達の遊びを見張る位でした。

彼等の家庭は平和な小さい巣で、邑からは半里ばかりの樹々の緑に蔽はれた谷で、下には小川がささやいて居ました。彼女は變化が來やうなどとは夢にも思ひませんでした、（誰でも變化は期さなければならないものではあり乍ら）が、とうとう、打擊は雷のやうに彼女の上に來て、彼女の仕合せな生涯はくづれて了ひました。夫が死なうなどとは誰が思ひ得ましたう。彼ほど丈夫な人は少ないのでしたに。林で働いて居た時、倒れて來る木に打たれて死んだ夫を人々は家へ擔いで來ました。

可愛がれた小供であり、愛された妻であつて彼女は、悲しみと云ふものを殆ど知らなかつたのでしたが、遂に强い勇ましい夫は運ばれていつて了つて、彼女ひとり世の中に立つこととなりました。

五人の子供とまだ口もきけない赤兒を有つて孤りの彼女はたづねました、「噫呼、なぜ强いものが死んで、弱いものが生殘るのであらう。」然し私共の助け人が居なくなつた時、何故つてきいて益に立ちませうか。この疑問はまだ一度も答へられたことがありません、此世では決して答へられないでありませう。

座つて泣いて居るひまはありません。彼女は立つて勞に堪へなければなりません。孤り彼女は起ちました、家庭を扶持し、子供達のパンをまうけなければなりません。

彼女の善い點は夫と共に去つて了ひました、彼女はもう今信仰も信頼も有りません、彼女は聖主の命令を耳して受けることが出來ませんでした、彼女にはそれがみんな不公平に思はれましたから。

善い聖主は寡婦の乏しいのを御心に懸けて下さいますけれど、彼女は聖主をよびまつりませんでした、彼女は一生懸命に働いて、運命と闘ひ、かうして一同は生活して居ました――併したゞそれつきりでした。彼女は運命と闘ひまして、然して多くの人々のやうに敗けました。私共は棘を押し屈げやうとするならば、それは猶更刺す斗りでございます。彼女は今子供達に我慢がしきれなくなりました。彼女は子供達を、禮儀知らず、野育ちとよびまして、やるせのない悲しみに、自分も一度は子供であつたことを、すつかり忘れたのでした。

實際、子供達は野育ちでした、然してすべての野育ちのものと同様快活で捷しつこくて、丈夫でした。然して彼女の憐れな傷ましい氣もちは、陽氣な云ふことをきかない群から背向きました。彼等は泳ぎ、木に登つて生命と遊びに滿ちて居ました。然し屢お母さんの聲が聞こえると、見えない所へ隠れて了ひました。子供達はお母さんを愛しませんでした、それを彼女は知つて屢つぶやきました。然し子供の愛は脅しや、小言で得らるものではありません。命令的に尊敬は得られもしませう、彼等は義務には従がひませう。然し愛といふ美しい、棘の無い薔薇は、若し少しでも生へるものなら、自然に生へるものです。

時が經つにつれて彼女は怒りつぽく、嚴しく、氣むづかしくなり、とう〳〵或日絶望して叫びました。『もうこんな生活には堪へられない、善き聖主よ、天から私の殘酷な運命を見玉ふて、お憫れみ下さいまし、何卒入らしつて、みいつくしみに、私の重荷をお除き下さいまし、餘り大き過ぎるのでございますから、私の心は重荷で碎けて、私の運命が傾いていくのを覺えます。私のやうな十字架を負ふてゐ

た婦人は一人も無いことゝ存じます。』
助けを乞ふ彼女の叫びに應答はございました。それは嚴肅で異樣なもので御座いました。彼女の周圍には深い沈默が來て、其の場所がすつかり變るやうに思はれました。
彼女は天上から床、壁も何所も一面に十字架の外、なにも無い傷ましく嚴肅な部屋に立つて居ました。古いのや、新らしいのや、大きい、小さいさまゞゝの十字架の眞中に、すべて其等の主として、聖主が立つて居玉ひました。
聖主のみ前に彼女の眼は俯き、我儘なつぶやきは消えました。何故なら、彼女は聖主が負ひ玉ふた十字架は、他のみんなより大きかつたのを知つて居ましたから。
聖主は彼女に、重くて負ひきれないと思つたそれと、取り換へて、數多くある中から、他の十字架を擇んで取れよと仰せられました。
彼女は一番小さいのを探して、すばやく一つを取り上げました。然れどそれは重くて、前の自分のよりも彼女を苦しめました。彼女は震へる手でそれをもとへ置いて彼女は叫びました。
『それは何方の十字架でございます。私のよりさへ重うございます。』
嚴肅な聲が答へられました。
『それは、青春と云ふものを殆知らないわかい乙女に屬する十字架である。彼女には晝間は苦しみの晝で夜は乏しい憩しか齎らさない。助けのない、なやむ、甲斐のないもの、彼女の苦しみは、死が氣の毒がつて來て、彼女のなやみが平和の中に終るまでは、決して止まないであらう。彼女はたのしい野原を歩いたこともなく、木蔭に坐つたこともない。彼女を閉ぢ込めて居る病院の壁ばかりが彼女の見る唯一の世界である。彼女は母なく、家なく、生きてゐる間彼女をいたはる者もなく、死ぬ時を泣く人なしに、他人の手によつて居る。』
『けれど、わが聖主よ、なぜ十字架がそんなに小さ

く、なぜ彼女の心は破れないのでございます。」
「彼女はそれをものとも思はぬ、それを我が爲に負ふからである。」
寡婦は俄に耻ぢて顔をあからめ、涙は眼に湧きました。彼女はぢき涙をほして、ふり返つて他の十字架を擇びました。それは彼女の手から落ちて壁にあたつて、其所に留まりました。
「私はたとへ再びもとの自分のをとるにしても、それは決して取りません。私に持てませんその十字架は何方のでございます。わたくしの手を燒きさうでございます。それほどな重さに堪えられるやうな强い心があつたとは思ひません。」
「その十字架は心やさしい妻のであつて、彼女はそれを全く人知れず負ふて居る。早くからの悲しみに彼女の髮は白いが、彼女はやすらかな微笑を浮べて居る。彼女はその心を邪まな人に與へた、彼女は彼を善良で眞實だと思つた。彼女は長い間まかせて信じて居たが、たう／＼事實を知つた。彼女は彼の魂が罪惡で汚れて居るのを知つた、然し一番惡いことを彼女は秘して居る。彼女の唯一の報酬は惡口と恐怖とであつて、彼女の思ひを聖主は知りたまふ。彼女を寂しい冬の夜に、彼の足音をきくとき、屢震へる、然して彼女は、殘忍な父の眼から、怖がるその子達を隱すのである。彼女は自分の手で自分を自由にすることが出來るけれども、敢へて死を望みもせずに居る。彼女の爲には墓で休む方がよいのであるが、併しそしたら子供達は何所にゐる事であらう。」
寡婦は震へました、彼女の顔は蒼くなつて、再び持つて見やうとしませんでした。彼女はそばの壁に手をのばすと、ふと一つの十字架をとりました。それは初めのほど大きくはありませんでしたけれど、恐らしく重いやうでした。
「私は今どなたのを持つて居るのでございます」
それはあんまり大きくは見えませんでした。
「それはあの母親の十字架である。彼女は以前、お前の様に六人の子持ちであつたが、子供はみんな死

んで了つた。彼女はその外は、この世の與へ得る限りをもつてゐる、友達もあれば、使ふ富もあり、家も地面もある、が併し、彼女は子供がない爲に、それらを數ふるに足らぬとして居る。時は次第に過ぎていつて、彼女は年をとる、がなほ此の世を去らないかも知れない。彼女は寂しい富のうちに、空な饑た心を有つて年月を數へるのである。彼女は誰に十字架がおくられたかを知つて、彼女の頭を垂げやうとつとめて居る、が、墓地にある六つの草靑き奧城こそ、今は彼女が最も心に懸けてゐるものである。』

寡婦は自分の亂暴な子供達を思ふと泌み入るやうな冷たさを感じました。

『私の十字架をおかへし下さいまし。私はなほもそれを持つて負ひまする。聖主よ、お赦し下さいまし（かう云つて彼女は跪いて、恥かしさに泣いた。）私は拜しもせず、聖主の聖旨を容けませんでした罪を存じて居ります。この世は辛うございますゆゑ、私に忍耐をおあたへ下さいまし、私は日々の力が要るのございます。お惠によりまして、私は定められた重荷を負ふことをつとめます。私は子供達がよけい心配をかけませうとも、私のあつかひ方を變へませう。可哀相な子供達、若し彼等が私を愛しませんでも、咎は私にあつて、彼等にないことを私は存じて居ります。』

週を重ねるに從つて、彼女はその言葉をまもりました。彼女はもはや運命とは鬪ひませんでした。彼女は今忍耐深い謙遜した心を持つて、日毎の十字架を負ひました。

子供達は顔に言葉に、母の大した變り方を見てあやしみました、彼女は今、一人々々にいつくしみ深い微笑と、やさしい言葉を以て對しました。彼女が口で敎へても甲斐のなかつた者等が彼女の變つた仕うちから、彼等は學びました。彼女が長い間、むなしくもとめて居た彼等の愛は、求めずに彼女に歸つて來ました。

母が見えると、樂しい叫びと小躍りする足とがあ

りました。彼女の廻りには小さな腕がかけられ、よろこびに輝いた眼がありました。教師に對する愛をもつて、彼らは手つだふことを學びました、小さな指にも仕事はありました。彼女の心は春の土のやうに柔らかになり、彼女は一切を聖主に感謝しました。

彼女の娘はいと美しく、彼女の子息はいと勇ましく　みんな心がやさしくて力になりました。彼女は昔呟いたことを屢且怪しみ、且つは恥ぢました。

子供達の前で、彼女は屢、缺乏と憂慮の重荷を忘れました、彼女はなやみを忘れました――彼女が負ふべき十字架を持つて居ることをも殆ど忘れたのでした。(了)

彙報

支部便り

會長の大責任を主の力に依りて

金城女學校青年會々長　梅本愛子

私は本當に足らない者で御座いますのに先頃の役員改選の際、會長を命ぜられました。私は本當の恥かしく思ひます、然し考へて見れば私が如何に小さく又弱くとも此の大責任は主の命じ給ふた務故出來ない筈はない又拒む事は出來ない、今は自分の力を賴まずに只主を賴にして力の限り盡し度いと思ひます、私は主が私の樣な罪人をも尙用ゐて此大責任を負はしめ給ひし事を心から感謝して居ります。然し未だ爲すべき事を知りません、色々と改め樣と思ふ事もありますが果して善ものか惡ものかをも存じませぬ四月に新學期が始まつてから役員方と種々相談致し度いと思つて居ります。私は本部に對する義務も會員に對する務も何も存じませぬ、本當に金城

女子青年會が少しく活動の度を高め度いと思ひます、又此度新に出來た清流女學校の女子青年會と私共の青年會とが互に助け合つて同じ目的の爲めに努力し、又互に連絡を付ける樣に致し度いと思ひます、如何したら宜しいか御敎示を願ひます。

漸く基礎が出來ました

廣島女學校青年會書記　鈴木濱子

段々暖くなりまして野山は綠濃き若草萠え立ち春らしくなつて參りました、本校青年會も皆々樣の御盡力に依りまして漸く基礎が出來ました。ゲンス校長と高森先生には顧問になつて戴き、林先生やシヤナン先生に名譽會員に御願ひ致しました。會費は毎月金參錢と定めて御座います。ゲンス先生に御願ひ致しまして青年會の爲めに御部屋を一つ戴きました、餘り大きくは御座いませんが委員長等の相談する事が出來る位の部屋で御座います、然し今から盛になつてもつと大きい御部屋でなくては困る位に致し度う御座います。そして出來れば來學期から會の事を報告致したり、又は雜誌を發行して會員全體に渡し度いと思つて居ります、又私は出來る丈け手紙を書き友人等を手紙で訪問したり、又先日木村清松牧師が御來校の折「南洋の人種性質を異にする女學生に英語の手紙等を同じ神の名の下に送つたならどんなにか喜ぶか知れない」と仰せられました故、是非何時か實行致し度いと存じて居ります。二週間計り前に委員長が集りまして部下に働く委員を選びました、次に委員長の名を列記致しませう。

會　長　田中　繁子　　祈禱委員長　本間　花子
訪問委員長　宮崎　貞子　　仕事委員長　伊藤　芳子
圖書委員長　今城　初子　　慈善委員長　米原　芳子
裝飾委員長　山本　仲子　　園藝委員長　日野原讓子
矯風委員長　河村　マギ　　視察委員長　松田　文子
親睦委員長　三宅　良子　　音樂委員長　柳原　靜子

其外祈禱會、仕事慈善會、聖書之組、懇親會、送

別會等を設けまして、時に應じて祈禱會を開きます、祈禱は凡の働の原動力となるもので大切な物で御座いますから此部は一番盛に致し度いと思つて居ります。日曜日の五時半より各委員長及び委員の者のみ集りまして青年會の爲祈禱會を開きます、前週の日曜日は之れを實行致しまして皆が心から一分の間もなく續いて祈禱を捧げました。仕事會の方ではお人形の着物を縫つて着せて西洋人に賣つたり、レースを編んだり、タテイングを致したりして一學期に一度或は二度慈善市を開いたり、又休には皆一人も殘らず何か仕事をして來る樣に致し、色々と盡力して居ります。聖書の組も拵へましてシヤナン先生にお願ひして研究會を致し度と存じて居ります。三月廿六日の午後二時から青年會を全校に紹介し兼ねて卒業生の送別會並に懇親會の樣なものを開きまして其時選んだ委員と委員長とを紹介し、各委員長は各自其爲さんとする處をお話致し誠に盛會で御座いました、其時音樂部では四部合唱をして下さいました、會長の言には此音樂は慈善音樂會の樣な物に用ゐ三錢或は五錢の會費を取つて慈善の事に用ゐ度いと申されました、來學期には之を實行致します、又園藝係の方ではもう畑を作りまして美麗な草花を植えて御座います、出來次第賣りまして青年會の爲め、に御金を作ります、先日も青年會の寄附金として籠を廻しまして參圓ばかりのお金が集りましたので皆大喜びで居ります、未だ甚だ不完全で御座いますが凡ての事祈禱と共に着々整ひまして、來學期には善き音づれを御聞かせする事が出來るかと樂しんで居ります。

北海道の大吹雪

遺愛女學校青年會

過日は河井先生の御來館を一同望を抱きつゝ御待申上げしも折惡しく大吹雪にて相叶はず誠に〳〵殘念に存じ候、當日は北海道にも珍らしき大吹雪に御

座候て電車は不通に相成、殊に區内より半里も離れたる當方にては道行く人とては更になく只田舍馬車の通りし跡幽かに殘り居り候、日曜日の朝、日曜學校にと二尺二三寸も積りし雪路をゴム製の長靴を穿ちて各方面に出掛け候ひしが何れも路なく到底歩み得ず途中より歸校致したる次第に御座候、斯の如き有樣にて甚だ遺憾に存じ候ひしが亦かゝる大吹雪に先生の御渡道は非常なる御迷惑と存じやう〳〵思ひ止まり申候。五六月頃には當地も好氣候に相成りリリーも咲き揃ふ事と存じ候何とぞ其頃に當方面に御出掛の事も候はゞ是非御立寄り下され度只今より御願ひ致し度く、別紙爲替金五圓僅少には候へども本部の爲め御使用下され度く願上候。

○小石川傳道女學校青年會　御慕はしい青年會の御姉上樣世は今春の女神の愛に包まれ鳥も樂しく囀つて居ります折柄御壯健で神の爲一心に御働きの事と御悦び申上ます、扨我小石川傳道女校學の青年會も皆樣の厚い御同情と熱心なる御祈に依り日々盛大になつて參りました、盛大なんぞと大した事の樣ですが決して左樣ではありません、前に比較せば少しく進歩したと申すのみです、然し以後出來る丈力を活して尙々會を盛に致し度日每主に其のみ求めて居ります、次に雜誌女子青年界を四月よりは二部を加へ全部にて五部宛御送り下さる樣に御願ひ申上ます、先年分と共に本年分の雜誌代御送り致します故御調べ下さいませ、尙此後とも天祐の豐かならん事を祈ます。（佐藏由緣報告）

○淸流女學校青年會　愈々春深く相成申候顧みれば先日河井先生御來校下され細々と御訓話御注意を賜り會一同眞に悦び居り候改めて厚く御禮申上候。天父の深き御惠と御指導の下に小きながら我青年會も凡ての樹木と同じく新學期を迎ふると共に益々芽を吹き出し候、扨今學期より仕事會を開催致し本會事業の一に加へんと努め居り候又新役員を左の如く改選致し候。

役　員

會　長　西山たづ子　副會長　山本つる子
會　計　田中　好江　書　記　上田　はる
委　員
圖書係　今井かね子　聖書研究　松井　操
集　會　鈴木とし子　社　友　不破　花子
誘　導　服部　一子

○**札幌女子青年會**　本青年會は一校内にあるにてはなく之は高等女子學校程度の女校三校より成り創立後日淺く基督教を内々排斥する傾の女學校もあり至極基督教の發展に妨となる事のみ多く、從て女子青年會等も一向に學生間に認られず候故中々會の精神を擴むると共に一般女學生に堅實なる靈を有たしむるは困難と覺え候、然し力の限り常に祈り天よりの助を得益々發展致して有益なる會として區内に重きをなす者たるべく奮勵致し居候誠御手數乍ら御會事業一覽表三十枚程御送り下され度候。(高松たゆき)

○**宮城女子校青年會**　當青年會も左の如き新役員を與へられ愈々御國發展の爲に勉むる事と相成候間何卒皆様の御指導あらん事を願上候。

會　長　田中　八重　副會長　木村とくゑ
會　計　村松　ふみ、松村としぢ　販賣部係　杉山　すて、今澤　きく、鈴木みゆき
書　記　成田さかゑ、加藤　ひさ　誘導部　鴫原　とみ
集會部　菅井　りう

扨雜誌代金四拾貳圓拾六錢也支拂申上候以後は支拂滯る如き事なき様に致し毎月御送附申上ぐ事に致し候尚大正六年度より御送り願ふべき雜誌數は會計より申上ぐべく候。(宗像千代子)

東京基督教女子青年會報告

四月八日(日)　六十餘名の者主の復活を祝さん爲當會館に於て祈禱會を開く讃美禮拜の後河井幹事の御勸めありたり我等一同は只管ら二千年前ユダヤにて十字架につき給ひ尚三日目に榮光の中に神に歸らせ給ひし救主を忍び奉りぬ。

四月十四日(土)　三寄宿舍及び諸學科の組の者等は新たに入られたる姉妹方の歡迎を兼ね午後より親睦會を開く、最初渡邊幹事は此處計劃せられたる會員募集に就き諸姉の御盡力に仰ぐ旨を發表さる後餘興及び遊戲等など甚だ打ち解けたる會合なりき來會者百余名にして中には事務員の方々も見へたり今迄好友園主任として御働き下されて世良田勇子姉は都合により辭職されしに依り廣島の保姆傳習所を卒業され暫く山口市の明星幼稚園に奉職されたる坂よし子姉後任者となり尚青山女學部卒業神林とめる姉助手として御働き下さる事となれり。

机上の友

○山根妙子様　四ケ年も大津に御働きになり今回岡山へ御轉任と伺ひ御悦び申上ます、後任者なきは誠に御氣の毒に存じます、貴女が大津で努力して下さいました事は決して無駄にはなりません眞面目に熱心に御人格を傷け給はざりし事丈でも大感化であります近頃は御壯健で渡らせられますか御自愛遊ばせ

○渡部とく子様　御手紙有難う御座います御手跡の奇麗なのに感服致します、今回奈良行御中止は如何程か御殘念でしたらう然しよき信仰を以て凡てを神に任せらるを知り神樣が必ず好機會を御與へ下さる事と存ます、仰せの通り人格の基礎を神に依て御作り下さいまし「信仰のすゝめ」は慥かに貴女を慰籍奬勵致しませうイエスキリストは十二才の時都で勉學せんと企てられましたが事情で田舍に歸り三十才迄世間に隠れて修養されました事を玩味なさいまし。

○島田初子様　昨今御病氣如何で御座いますか先日御妹樣に教會で御目に懸り大層な御成人に驚きました今は御壯健ですから御安心下さい。

○大呑久子様　度々加奈陀よりの御通信を謝します珍らしい御經驗を重ねられ元氣に御勉强もなさりバスケツトボールもなさる由皆一同悦んで居りますカフマン様が御歸へりになつたら嘸樣々の御消息を伺

ふ事と樂しんで御待ち致して居ります。

○弘瀬晴子樣　御父君御病氣の由如何で御座いますか御看護の爲御疲勞で御座いませう春の好期となりました故必らず御全快の事と存じます御大切に。

○渡部豐子樣　御手紙頂き深く感じ入りました、御忙しき中二度迄も集會に御出で下された事を忘れません聖書は讀めば讀む程意味深いものです六ヶ敷事も澤山あれば又了解し易き場所も澤山に御座います其故態々最初から理解らぬ事のみを拾ひ集めず手易き方より御檢讀下さい、折りを得て信仰の話を御聽き下さるやうに御願ひ致します。



おとづれ

努力しましょう

弘前　澤ロッヤ子

河井先生が今日弘前に御出になり御蒔下されし種は必然育まれ養はれて實を結ぶ時があると信じ祈つて居ります。

長い間何の刺戟もない平凡な空氣に浸されて眠りかけて居りました精神は強く鞭打たれました、そして凡てに臆病で弱かつた自分の過去を潔く葬りて、新しい長い未來に生き樣とする強い決心が與へられました。

三月廿三日の朝は同僚三人と御一緒に弘前女學校の卒業式に出席して河井の先生の御講話を御伺ひ致しました。たとへキリスト教に對して好意をあまりもつて居りませんとしても眞理を穿つたよい御語が人の心の誠にふれぬはづは御座いません、教會を出た時四人で云ひ合しな樣に「まあ何といゝ御話でせう、私等はほんに蛆虫のやうね恥づかしい努力しませうよ」こんな事を繰返しました、御一人の方は感に迫つて涙ぐんで居られました、私も不德な我身が情なく涙せずには居られませんでした、けれども此の涙が一時的のものでなくいつも此の時の樣な心持で凡てに努力したいと切望してますます主の御惠と皆樣の御祈の力で強くなれると信じて居ります。

三十日に英學塾に行つて居られる高女の卒業生が歸られて久しぶりになつかしい塾の御便に耳にして昔を忍びながら發展して行く塾の爲、そこに御働き下さる先生方の爲所々に散つてる先輩同輩の爲

御幸運を祈つてます、昨日(二日)岡本さんを御訪ねして久しぶりで、たつた二人ぎりにいろんな話に時をすごし(夜八時頃まで)最後に讃美歌を歌つて御別れいたしました、いつもながら凡を神に捧て世の榮華をふりすてゝ省ない岡本様の御態度の勇しいのに驚きます、そしてほんとに嬉しく有がたく貴く思はれます、いよ〳〵此度文部省の指定をされました、此の策ある發展の裏に岡本さんの血と汗がどれだけ流れて居るでせう。

理論ばかりでは

東京　長島幸代

全く宗教と云ふ物は理論ばかりでは決して其の神秘的な處迄知る事が出來るものでない事を初めて知る事が出來ました、やつぱり普通の未信者が知り得る事の出來ない安心樂みを私の如き者が幾分かを得ました時の幸福さ、嬉しさは私をして直に神様に感謝を捧げる念を起させました。

眞に只一の眞の神様を知りますには確に謙りて小供の心にならなければならない事をも知りました、長い間求めてもく〳〵得る事の出來ませんでした境遇を現在此所にて得ました事も深き神様の御攝理との外は考へられません。私は感謝に充ちあふれて居ります心は春の靜かな湖の様で御座います、此有難き深き惠を頂きました以上は無上の責任をも感ぜられました、けれ共是を果しますには神様の無上の御助と御力とが私に下りますから私は此を容易に出來ると信じまして如何なる苦みをも忍ぶ決心で只今生活致して居ります。所が悲しい事には少しも苦が來ませんから、毎日〳〵準備を怠りません。

三本の櫻はどうして洋行したのです

米國プリンマー大學　内田文子

去る冬は殊に北向の私の室にてはインリ石鹼の氷る朝は度々ありましたが幸ひ健康にて未だ講議には一度もかゝさず出席致す事の出來しは感謝致して居ます、昨今雪とけて草地は沼の様ですが追々青めいて駒鳥が澤山とび初めました、近き内に校内の日本の枝垂櫻花も咲きませう、あの三本の櫻はどうして洋行したのですか御なじのもので御座いますか。

二週間斗前に一柳様見え數日御滯在になり、日本食を御料理して頂き佐藤様と三人にて舌打して頂きました、いよ〳〵九月には御歸國のよし。

卒業生の中に獨人の留學生あり米獨關係絕たるゝや直に退校し紐育に行て働き居り同氏の記事が昨日の新聞に出て居ました、此の學期は政治をいたして居ます日本の問題が度々もち出され組の初めに毎朝時勢問題も論ぜられ面白う御座います。

學生の時代に

名古屋　寺内ぶん

信仰の試練には名古屋に於る二年間を隨分苦しく送りました然し其丈多く神を知り神の愛に浴し得た事は何物よりも感謝して居ります、其につけても學生時代に救はるゝ事の大切さを染々と己の小さな經驗から感じさせられて居ります、あの時代程純な父眞理を慕はしく思ふ慾の勢な事はない様に思はれます、我國の宗教自由と申す

事が眞の意味で行はれましたら多くの學生が學校を憚からず教師を恐れず學業の傍ら人間の眞の道を修養し得ませうが現今の狀態では實に可歎い事と存じます生徒が靈に飢えながらよき導手を得ず居るを知ります程責任を愈々感じ其と同に自分の日々の醜くさを省みて戰慄致します、何としても神の愛と神の智慧に活きなければ滿足に此の職を盡す事は六ヶ敷と存じ僅かに其努力の内に日々を送らんと致して居ります。

◎精神的働の爲めよい智惠をお貸し下さい

加州櫻府　宮川春野

小野女醫渡來に就きましては一方ならぬ御心配に預りまして有難う御座いました、御蔭樣にて好都合に上陸が出來まして以來私の病院にて働いて頂いて居ります、小野女史も御厚意に對し厚く感謝して居られます、御存じの當地女子青年會も以來兎にも角にもやつて居ります、先般も演藝バサー等を致しまして之等の方面には可成成功いたしましたが其よりも其が精神的な善い働きが致したいものと考へて居ります善い智惠をお貸し下さいます樣御願ひ致します、何を致しますにも信徒の少なき所で御座いまして心細さを感ぜずには居られません、けれど以美教會にても長老教會にても盛に傳道を致し求道者も大分出來ました趣で大に悦んで居ります、何卒私共の爲に御祈り下さい。

◎過ぎし年の御講話を思ひ出でられ候

臺灣　澤田みや子

御會も皆樣の御力に依り月に日に榮へさせ給ふ御事業を拜見致し誠に嬉しき御目出度御事と存じ上候過にし年の河井先生の御渡臺被成候時の御講和折にふれ事に當りて思ひ出でられいとゞ御懷しく存じ上げ候。

◎九年間住み慣れし我家

東京　内田賤

關西御旅行の御記事種々懷舊の情に滿たされ拜見いたし、姫路の練兵場より御覽遊ばせしならん白鷺城と向ひ合へる一の教會の塔は九ヶ年間住み慣れし我家にて日の本女學校の集りなど一種の感も思ひ出で申候又は我が愛する同志者の上など思ひ出でゝは此度こそ彼處にて倒れんと決心してまゐり候に不思議の導きによりて再び東上はせしものゝ私も今少し何かの素養あらばもつと働くべかりしものなどの懸應の心もわき出で申候されど凡ては皆聖旨と御攝理とに歸して現在をも滿足して過ごし候事可然かとぞんじ居り候。

◎毎月送り下さる毎に靜に考へます

山形　八島稻子

私は上野俊子先生の御指導により御誌を拜見致す事が出來る樣になり尊き先生の御惠みに浴する樣になりました母の元に不充實なる

日を送る身に「女子青年界」は最も尊くございます、御旨のまゝに活動し翌められ心に植えつけられて行く事が出來ましたならばど　なに幸福な事で御座いませう毎月送り下さる毎に靜かに考へ熟讀致し一つなりとも心に植えつけられて行く樣に努めて居ります十二月號一月號共に尊く拜讀致しました「旭は昇りて世を照らせり」「女よ起きよ」一等心の汚れを去り不屈な精神を養ふに好師範と存じます青年界によりて我が身を處し理を解し慾望を去らんと思ひます。

◎「女子青年界」を通じて友を與へられ候

米澤　上野とし子

「女子青年界」の「凡ての事感謝すべし」と題したる私の手紙を通じて私に尊い友を與へられました、某小學校に奉職して居る方で「青年界」を何處で如何なる手續で得られしか御讀みなされ米澤とある私がどこに居るか尋れられ女學校に居る事を高女會報によつて知り他の先生を通じて私に話をなど申されました、私は御目にかゝりたいと思ひましたが歸省してだめで御座いましたので、求道者によろしき本を集めて御送りいたしました先日感謝の御手紙を拜見いたしました心の畑の御用意のありました方ですからよき收穫の日を祈つて居ります。

◎意義ある生活を望み居候

和歌山　和田花子

大正三年六月朝鮮より高知に轉じ又五年十二月に當和歌山に轉住致しました、東京五番町の河井先生の御二階で御目に懸りました彼時よりまだ東京に一度も參りません田舍より田舍に煽りかへつて居ります昨年十二月の末女子をあげようく三人の母になりました長男は修と申し當年六つ次男齊は四つ赤坊は紀美子と申し漸く生後五十日餘りになります大勢の家族となり意氣地なき私にはそれは大變なものですどうか御都合御よろしき時御遊びに御出下さいませどんなにく歡迎いたしませうか引繰返つた家の中嘸吃驚遊ばすことでせう。

隨分御多忙とは山々御推察申上ますがどうか御都合御つけ遊して御出で下さいませ誰方樣かお出て下さらないかと心待にまつ一居るので御座います高知へは元田先生が協同傳道で御出でになり御泊り下さいましたので本當に嬉しく存じました高知と申せば思ひがけなく豐野樣と廻り遇ひまして其後昔の交をいたし御互に嬉しく存じて居ります。

自分の平和に幸福に暮す事が出來ますにつけても逆境に御奮闘の友を一しほ思つて居ります最後の幸福は何れにあるか分りません平和に慣て生甲斐もなき生活して居る私は神樣の御目から御覽遊したら定めて哀れな者と思召すかと存じますと誠にお恥かしくもつと意義ある價値ある生活を致さではと反省いたしております學生時代氣の小さい至て神經過敏の私が此頃は實にく樂天家となり呆れる程横着者になりました御陰で笑つて暮せる樣になりました。

○入會申込者（本部報告）

山崎いく子、髙橋ため子、

○本會事業寄附金領收（本部報告）

金貳拾七圓也　女子英學塾青年會
金五拾圓也　齋藤とら子
金貳圓六拾四錢也　東洋英和女學校青年會
金貳圓也　河井道子
金拾圓也　多木粂次郎、女子學院、荒木幸子
金五圓也　星野あい子

○夏期修養會費寄附金領收（本部報告）

金五圓也　吉安延太郎、手東靜子

○萬國本部負擔金領收

金貳圓四拾四錢也　神戸女學院青年會
金壹圓七拾六錢也　東洋英和女學校青年會

○會友費領收（本部報告）

○金貳圓也

中須　信惠（大正六ノ三―七ノ二）　澤口つや（大正五ノ十―七ノ十一）
守田　長代（大正五ノ二―七ノ一）　中村ならえ（大正五ノ三―七ノ二）
北原　延子（大正五ノ四―七ノ三）　岩倉　よね（大正五ノ四―七ノ三）
國分　みね（大正五ノ五―七ノ四）　中岡　りつ（大正五ノ四―七ノ三）
松本　貞子（大正五ノ四―七ノ三）　石崎　正惠（大正五ノ三―七ノ三）
羽田野てる（大正六ノ五―七ノ四）　桑原　まさ（大正五ノ一―六ノ十二）
荒木幸子（大正五ノ一―六ノ十二）

○金壹圓也

岩村　幸（大正六ノ三―七ノ二）　一條まさえ（大正五ノ四―六ノ三）
京野　きん（大正六ノ一―十二）　小出　滿二（大正六ノ一―十二）
松村　乙和（大正六ノ一―十二）　上野　俊子（大正六ノ三―七ノ二）
山田キヨノ（大正六ノ三―七ノ二）　丹羽　梅子（大正五ノ一―十二）
三宅　あい（大正六ノ一―十二）　森久保壽子（大正五ノ一―十二）
宮川　幹枝（大正六ノ八―七ノ七）　前川　久次（大正六ノ四―七ノ三
山崎　いく（大正六ノ三―七ノ二）　三島　つな（大正六ノ三―七ノ二）
井石　長子（大正六ノ四―七ノ三）　中野　やす（大正五ノ四―六ノ三）
三谷　民子（大正六ノ一―十二）　渡邊　すみ（大正六ノ十―七ノ九）
小原　浦（大正五ノ十二―六ノ十一）　森田　貞（大正六ノ一―十二）
原田ことぢ（大正六ノ四―七ノ三）　鹽谷すゞ子（大正六ノ四―七ノ三）
野崎　かい（大正六ノ一―十二）　髙橋　ため（大正六ノ四―七ノ三）
安孫子八重（大正六ノ一―十二）　青柳　みや（大正七ノ一―十二）

○金壹圓五拾錢也　島田　初　（大正六ノ六―七ノ五）
○金四圓也　加藤　さく　（大正五ノ一―七ノ十二）
○金參圓　齋藤　ちよ　（大正五ノ一―七ノ六）

○雜誌「女子青年界」代金領收（本部報告）

○金八拾錢

上野　久米（大正六ノ三―七ノ二）　金非まきよ（大正六ノ四―七ノ三）
須　美　氏（大正六ノ四―七ノ三）　山田　琴（大正六ノ四―七ノ三）
竹内みどり（大正六ノ四―七ノ三）　服部　かす（大正六ノ四―七ノ三）

松田 松代、谷 みさを、足立 あい（大正六ノ四―七ノ三）
日野原 讓、松原 榮、仁本 なみ（大正六ノ四―七ノ三）
今城 テウ、山村 千代、山口 イチ（大正六ノ四―七ノ三）
渡部 とく（大正六ノ三―七ノ二）平賀 みよ（同 上）
上村 こう、佐久間よし、岡村イセノ（大正六ノ三―七ノ二）
片岡 民（大正六ノ一―十二）本間 愛（大正五ノ十二―六ノ十一）
河野 幸（大正六ノ六―七ノ五）加茂 あや（大正七ノ三―八ノ二）
神戸女學院（大正六ノ二―七ノ一）清流女學校（大正六ノ二―七ノ一）
東洋英和（大正六ノ三月十部代）清水千代香（大正六ノ一―七ノ一）
安藤坂寄宿舍（大正六ノ一―十二）西 綾（大正六ノ四―七ノ三）
光 篤子（大正六ノ四―七ノ三）小川 雪枝（同 上）

○金壹圓也 同志社青年會（大正六ノ四―七ノ五。一部代）

○金壹圓六拾錢
本多 かず（大正五ノ四―七ノ三）宮崎 ぶん（大正五ノ八―七ノ七）
黑田 治子（大正五ノ四―七ノ三）樋地 宮（大正五ノ十二―七ノ十一）
傳道女學校（大正五ノ十二―六ノ三月分）

○金壹圓貳拾錢也
明井 あさ（大正五ノ四―六ノ九）里村 福與（大正六ノ三―七ノ二）
坂部 イチ（大正六ノ一―十二）瀨藤 朝子（大正六ノ一―十二）
中西 菊子（大正六ノ一―十二）志立 やな（大正六ノ四―七ノ三）
武田 そめ（大正ノ四―七ノ三）

○金六拾錢也 白井 あや（大正五ノ六―六ノ三）

○金貳圓參十貳錢也 遺愛女學校（大正六ノ四月二十九部代）

○金四拾貳圓拾六錢也 宮城女學校（大正四ノ十一ヨリ同 六ノ二マデ 四百六十五部代）

○金壹圓參拾貳也 中村 玉子（大正十二―六ノ三マデ）

○金參圓六拾錢也 建林 ツネ（大正六ノ一―十二各三部）

○金參圓七拾八錢也 橫濱青年會（大正六ノ四月五十四部代）

○金參圓七拾錢 同（大正六ノ三月分代）

○金五圓六拾錢也 傳道女學校（大正六ノ四―七ノ三各七部代）

電・話・と・振・替

東京市神田區北神保町十四番地

日本基督教女子青年會本部

電話本局五九八番

振替東京貳參七貳參番

「女子青年界」定價及廣告料

定價郵稅共		內地	海外
	一部	金八錢	金拾壹錢
	一年前金	八拾錢	金壹圓貳拾錢

廣告料	一回掲載
一行	金參拾錢
四分一頁	金二圓
半頁	三圓五拾錢
全頁	金六圓

年極又は回數により割引有

大正六年四月廿八日印刷納本
大正六年五月一日發行

發行所 神田區北神保町十四番地 日本基督教女子青年會
發行兼編輯人 神田區北神保町十四番地 河井道子
印刷人 芝區櫻田和泉町七番地 前川吉次郎
印刷所 芝區櫻田和泉町七番地 三成舍

THE YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

VOLUME XVI   APRIL, 1917   NUMBER 4

The Tokyo Y. W. C. A. is giving a concert for the benefit of its general work on April 28th in the Y. W. C. A. Hall. The program has been arranged by Miss Elsie Greene.

On May 12th the Yokohama Y. W. C. A. will give a benefit concert in the hall of the Y. M. C. A. The program has been arranged by Mrs. Chiyo Nishikawa and Miss Nobu Suzuki.

On Friday, the twentieth, Miss Emma Kaufman, Associate General Secretary of the Tokyo Association, returned from a year's furlough in America. Her father and mother and younger sister returned with her to spend several months travelling in Japan and China.

Miss Ruth Ragan, for the past winter acting General Secretary of the Yokohama Association, will leave for furlough on May 19th.

On April 21st Miss Rena Carswell, National General Secretary of the Y. W. C. A. of India, passed through Japan on her way to America. She expects to do deputation work in the United States and Canada, and go on to England in the summer if possible.

Miss Grace Coppock, National General Secretary of China, passed through Japan not long ago for a six months furlough in the United States.

During the month of March Miss Kawai made a trip to the north of Japan, visiting Kawamata, near Sendai; two nearby villages; Hirosaki Girls' School; Yonezawa Girls' High School; and Morioka. She had intended visiting Hakodate and Sapporo, but was prevented by the severe snow storms. Kawamata is in a township devoted to silk culture and weaving. This was taught to the people by an old court lady who was once exiled to that place. Weaving is done in the houses and in small factories, the largest of which employs one hundred and five girls. One thousand one hundred and seventy girls in all are employed in this way in the village. A Mrs. Tamaru, who is a Bible woman, working under Mr. Noss of the Reformed Church, has rented a big house in the midst of the town. She calls it a Young Women's Association, and here the factory girls come to rest, sew, knit and sing. She had two meetings for Miss Kawai. Seventy girls came in the afternoon and the same number in the evening besides thirty of the leading men of the village. The next day Miss Kawai had a meeting in one of the public schools of a nearby village. Two hundred people attended and she was allowed to speak freely of Christanity. The following day in another nearby village she held a meeting. In this village is a factory owned by a Christian man with three hundred girls employed. The pastor of the Christian church holds daily meetings with the girls. Miss Kawai was invited to speak to the whole group of girls in the factory dormitory. She was also asked to find some Christian matrons to look after these girls.


ピアノ・オルガンは
東京銀座
山野樂器店
電話京橋 一〇五二 二二九八
振替東京 一三五〇五

新刊

■倉長巍著
ヨハネ傳五十講
定價上八十錢 並五十錢 郵税八錢

■ポーター作 弘中つる子譯
パレアナ
表装美麗 定價八十錢 郵税八錢
原作一年ならずして二十版を重ぬ。面白く有益なる家庭小說。クリスマスの贈物に好適す。

■シムプソン著 中澤正七譯
人生の事實
定價上七十錢 並五十錢 郵税八錢
著者十餘年の研究になりし好著なり。

■グリーソン著 武本喜代藏譯
山上說教
定價五十錢 郵税二錢

■大井一郎著
耶蘇基督
定價二十錢 郵税四錢

■エインズレー著 大岩元三郎譯
神と我
定價十五錢 郵税二錢

■バルトオ著 赤星仙太譯
我子の生立の記
定價三十錢 郵税四錢

■バークレー著 岩村清四郎譯
教師及教授法
定價二十錢 郵税二錢

新しき傳道叢書

■植村正久著『耶蘇の學校』定價二錢
■同上『人生と宗教』定價三錢
■天笠海軍大佐著『我が信仰と基督教』定價六錢
■谷津理學博士 山本工學士 大工原農學博士 共著『科學と信仰』定價二錢
何れも趣味深く有益なる文學、時代に適當せる傳道小冊子なり

新しきトラクト

■『眞の平和』
■『眞の救』
■『眞の教』
■『神との交通』(大江蘇美子述)
■『潔き家庭』(江原素六述)
■『理想的社會』(石原素謙述)

定價 千部 壹圓五拾錢 (郵税共)

發行所 東京市京橋區明石町八番地 日本基督教興文協會

發賣所 警醒社、敎文館、基督敎書類會社、福音書店、丸善書店、岩波書店

女子青年界第拾四卷第五號（毎月一回一日發行）
大正六年四月廿八日印刷納本　大正六年五月一日發行　明治卅七年五月七日第三種郵便物認可